名古屋経営短期大学 子ども学研究論集第 13 号　39～54 頁

入門期のかな文字学習につながる力を育てる
―書きことばへの意欲を育むことば遊び・文字遊びの活動―

陳　　惠　貞
杉　本　美　苗

＜摘要＞
家庭の経済格差が学力格差や教育格差を生み出し、貧困の連鎖へとつながる貧困問題がとり沙汰されてから久しい。貧困による学力や非認知能力の格差は、小学校入学時にはすでに生じている。入学後に開始される文字学習でのつまずきは、その後の学習意欲や学力の獲得にも影響する。全ての子どもが自信と安心をもって小学校生活をスタートできるよう、就学前に小学校教育を見通して入学以降の学びの土台を育み、学びに向かう力を育まなければならない。遊びの中でことばや文字への興味や関心を育み、学びの土台となる力、特にかな文字の学習につながる力と書きことばの世界への意欲を育むことができる楽しい活動を実践し、検討することが本研究の目的である。かな文字の学習の土台となる力を楽しく育む方法を検討し、養成校の学生に伝え、保育者養成の一助になることを目標としている。就学前の書きことばの移行期においては、文字やことばに親しむ体系的な活動は、遊びの中で楽しくことばや文字への興味や関心を育んで、文字の学習につながる力を育み、書きことばへの意欲を高めることを、実践の中から明らかにすることができた。

キーワード：教育格差、貧困問題、認知能力・非認知能力、就学前文字教育

Ⅰ．研究目的

小学校入学後、教科学習の基礎となるかな文字学習が開始される。ひらがなの読み書きは、全ての教科の学習に影響するが、入学時における子どもの文字への興味・関心やひらがな習得の状況は、個人差が大きい。全ての子どもが安心感と意欲をもって小学校の学びをスタートできるように、就学前に小学校教育を見通して学びの土台と学びに向かう力を育まなければならない。

全ての家庭が自然に文字を習得できる環境にあるわけではない。日本財団の「家庭の経済格差と子どもの認知能力・非認知能力格差の関係分析」[i]（2018）によると、小学校入学時には貧困による学力や非認知能力の格差がすでに生じている。2019 年末から発見された新型コロナウイルス（COVID-19 以下はコロナと略す）の感染拡大は、2022 年 1 月現在まで波状的に繰り返され、日本全国ないし全世界の経済停滞を一層加速させる可能性がある。貧困を背景にした教育格差や貧困の連鎖リスクのさらなる拡大が懸念されている。経済的、環境的な要因や発達の偏りなどからことばの育ちや学習のレディネス(Readiness）が十分育っていない子どもや、外国にルーツをもつ子どもなど、入学後の学習でつまずきを生じる可能性がある子どもたちに対して就学前からの丁寧な支援が求められている。

幼児教育における文字指導は、単に文字の読み書きを教えることではない。小学校入学後に書きことばの世界に入ることを見通して位置づけられなければならない。発達や学びの連続性を踏まえて、小学校への接続を意識して進められるべきである。文字指導の意図的・具体的な内容や指導方法についての理解や実践は、明らかにされていない現状がある。入門期のかな文字学習の土台となる力を就学前に丁寧に育てていくことは、喫緊の課題である。そこで、遊びの中でことばや文字への興味や関心を育み、学びの土台となる力、特にかな文字の学習につながる力と書きことばの世界への意欲を育むことができる楽しい活動を実践し、検討することが本研究の目的である。文字の学習につながる力を育む方法を検討し、養成校の学生に伝え、保育者養成の一助になることを目標としている。

Ⅱ．研究方法

対象：愛知県内Ａ市にあるＢ保育所の園児 15 名。

療育センター受診中が 4 名。うち 2 名がことばの療育を受け、1 名は発語が限られている。

外国にルーツを持つ子どもは 2 名で、うち 1 名は来日して日が浅い

内容：文字の学習につながる力と書きことばの世界への意欲を育むことができるように、楽しいことば遊び・文字遊びの活動や読み聞かせを実践し、小学校を見通した文字指導のあり方やその方法を検討する。活動では子どもの文字への興味・関心、発達の状況や読み書きの個人差を考慮して進める。

毎週 1 回 60 分。園児との信頼関係を築き、活動を円滑に進めるため、その他に園の行事にも参加する。

期間：実施期間は 2019 年 10 月～2020 年 3 月（全 28 回）

活動実践者：杉本美苗（東アジア保育者養成研究会の共同研究者）

倫理的配慮：実践活動を実施することにあたって、園長に説明したうえで了承を得た。また、実践活動が共同研究として、学会発表や研究論文などで発表すること、研究以外に使用しないことを約束し、口頭で許可を得た。さらに、保護者に対しては、園から個人情報は守られることや研究以外に使用されることはないことを説明してもらい、了承を得た。研究デ

ータを研究責任者が慎重に保存し、研究以外に漏れないように厳重に保管する。

実践内容：

１．かな文字学習の土台となる力

かな文字の学習につながる力とは、①文字や書きことばへの興味や関心、②文字習得の前提となる音韻意識（音節分解・音韻抽出の力）、③文字を書くために必要な運筆の力（線や形が自由に描ける）、④字形の認知（文字の形を捉えるための空間認知）である。書き言葉の世界への意欲や動機を丁寧に育て、書きことばの土台になる話しことばも豊かにしていかなければならない。

ことば遊びや文字遊びに体系的なかな文字指導である「音声法」を取り入れ、楽しく音節と文字のと結びつきに気づかせ、音韻意識を体系的に育てる。また、小学校への接続を意識したことば遊び・文字遊びや読み聞かせにより書きことばの豊かな世界を体験させ、書き言葉への興味・関心を育む。併せて、文字を書くための運筆練習や、望ましい鉛筆の持ち方を意識できるような活動にも取り組む。活動ではどの子も楽しく活動できるように発達の状況や読み書きの個人差を考慮し、スモールステップで丁寧に指導を進めることができる特別支援教育の支援スキルやアイデアを取り入れて楽しくかな文字学習につながる力を育むことができるようにする。

２．実践時期と実践の概要

＜第 1 期：2019 年 10 月～12 月、計 12 回＞

表 1　　第 1 期（2019 年 10 月～12 月）の実践内容

回数	ねらい	活動内容	読み聞かせの絵本
1	興音表共語	自己紹介をしよう★ しりとりをしよう	しりとりのだいすきなおうさま※
2	興音表共語	自己紹介をしよう★ あしざん（ゲーム）☆	たまごにいちゃん
3・4		実態調査	
5	興音表共認	あっちむいてほい 福笑い遊び☆	あっちむいてほいぞう※ ひだりみぎ※ おめん※
6		運動会	
7	興音共語書	配膳方式のかるた取り☆ 「あっちゃんあがつくたべものかるた」	むしたちのんどうかい あっちゃんあがつく※
8		小学校作品展鑑賞	
9	興音表共語書	グリコじゃんけん☆ みんなのなまえ（音節分解）☆★ ひらがな絵カード合わせ☆	どかどかじゃんけん大会（紙芝居）※
10	興音表共語書	音節記号を知ろう☆★ みんなのなまえ（音節分解）☆★ ひらがなめくり（ゲーム）☆	がんばる！たまごにいちゃん
11	興音表共語	ことばのかくれんぼ 名前のかくれんぼ あしざん（ゲーム）☆	きょうりゅうのたまごにいちゃん めくってごらん※
12	興音表共語書	さかだちことば さかさのともだちだーれだ ひらがなビンゴ☆	さかさのこもりくん※

音声法を取り入れた豊かなことばの楽しい体験を通して音節と文字との結びつきに気づかせ、文字指導の基礎となる音韻意識を体系的に育てる。

＜第 2 期：2019 年 12 月～2020 年 3 月、計 16 回＞

入学後のかな文字指導につながる活動で、書きことばの世界への意欲や、小学校での学びへの期待を高める活動を中心にして進める。

表 2　第 2 期（2019 年 12 月～2020 年 3 月）の実践内容

回数	ねらい	活動内容	読み聞かせの絵本
13	興音表共語書	ことばの変身ボックス☆★ 「〝」つけて「てんまる変身」 ひらがなめくり（ゲーム）☆	へんしんトンネル※ てんつくサーカス※
14	興音表共語書	五十音をつくろう☆★ ことばの変身ボックス☆★ 「かっぱ変身」（促音） 「ふくろう変身」（長音） ひらがなめくり（ゲーム）☆	へんしんかいじゅう ことばのあいうえお※ れいぞうこ※
15	興音表共語書	ひらがなスタンプ①☆ 「すきなもの　おしえてね」	さかさのこもりくんとおおもり まめうしくんとあいうえお※
16	興音表共語書	ひらがなスタンプ②☆ 「名刺でよろしく」	ともだちや
17	興音表共語書	ひらがなスタンプ③☆ 「名刺でよろしく2」	さかさのこもりくんとこふくちゃん
18	興音表共語書	ひらがなスタンプ④☆ 「しりとりをしよう」	かえってきたへんしんトンネル たべものやさん　しりとりたいかい かいさいします※
19	興音表共語書	ひらがなスタンプ⑤☆ 「お手紙ごっこ」	よろしくともだち※
20	興音表語書運	粘土で自分の名前の文字をつくろう☆★ 動画で書き順を知ろう☆★	なにをたべてきたの※
21	興音表語書運	自分の名前の文字をドットシールでつくろう☆ 動画で書き順を知ろう☆★	さかさのこもりくんとてんこもり
22	興表書運	鉛筆の持ち方☆★ 鉛筆で書こう☆★	あいつもともだち
23	興表書運	箸の持ち方☆ マカロニ移し 箸の持ち方と鉛筆の持ち方☆★	999ひきのきょうだい
24	興表書運認	にんにん体操☆ 鉛筆の持ち方☆★ 運筆練習☆★	ぼくのくれよん※ ぐるぐるぐる※
25	興表書運認	にんにん体操☆ 鉛筆の持ち方☆★ 自分の名前のプリントを書き順の色で書こう☆	999ひきのきょうだいのひっこし
26	興音表書運認	鉛筆の持ち方☆★ 自分の名前のプリントを鉛筆で書こう☆★	いつだってともだち
27・28		実態調査	

㊟ねらい（興）ことばや文字への興味や関心を育てる（音）音韻意識を育てる

（表）自分の思いや考えを表現する　　（共）先生や友だちと一緒に楽しむ

（語）語彙を拡充する　　（書）書きことばの世界への意欲を高める

（運）　運筆の力を育てる　　（認）　空間認知の力を育てる

㊟　☆　　特別支援教育の支援スキル・アイディア

㊟　★　　小学校で行われる文字指導の内容に関連

㊟　※　　活動につながり、活動への意欲を高める絵本

Ⅲ．結果と考察

１．実践前後の実態調査

実践の前後に、ひらがな 71 文字（清音 45 字、濁音 20 字、半濁音 5 字、撥音 1 字）の読み、自分の名前の書字、鉛筆の持ち方について個別評価した。

実践前には、ひらがなの習得状況の個人差が大きかった。半数以上の子がほとんどのひらがなを読むことができる一方で、ほとんど読めない子も数名いた。多くの子が自分の姓名を書くことができたが、字形や筆順の誤りが目立ち、字形も筆順も正しく書けたのは 1 名であった。ほとんどの子は筆圧が弱く、手指をコントロールする力が育っていない。のぞましい鉛筆の持ち方ができた子は、1 名であった。

実践の結果、読みについては、特別支援級入級予定の 2 名を除いて、ほとんどの子がひらがな 71 文字を読むことができた。特別支援級に入級する子の伸び方は小さかったが、保護者から文字への興味が増していることが度々報告された。未調査の 2 名は文字遊び以外の個別の関わりがあり、その中で声を出して絵本を読む様子を観察したが、拗音以外のひらがなを正しく読むことができていた。書きについては、15 名のうちの 12 名が姓名全ての文字の字形が正しく書けるようになった。そのうち半数の 8 名は字形も筆順も正しく書くことができた。また、ほとんどの子に鉛筆の持ち方に気をつけて書く様子が見られ、筆圧も増していた。のぞましい鉛筆の持ち方ができる子は8名であったが、11名に鉛筆の正しい持ち方を確認してから書こうとする姿が見られた。

表 3　読みの実態調査と実践結果　　n =15

第1回（10.23）									
文字数	71	68	65	46	16	6	2	1	0
人数	7	1	1	1	1	1	1	1	1
第2回（3.30）									
文字数	71	62			9		2		未調査
人数	10	1			※1		※1		2
					※特別支援級入級予定				

表 4　書きの実態調査と実践結果　　n =15

		第1回	第2回
字形	名前の文字全てが書ける	2	12
筆順	名前の文字の筆順が全て正しい	1	8
字形＋筆順	名前の文字の字形も筆順も正しく書ける	1	8
筆圧	弱い	11	1
鉛筆の持ち方	望ましい持ち方ができる	1	8
	鉛筆の持ち方を確認してから書き出す		11

＜調査方法＞

1 文字ずつ書かれたひらがなカード 71 枚を見せて、音読する様子を記録した。71 字の提出順は、国立国語研究所の「読み書き調査」の出題順とし、評価の観点も調査に従う。

＜調査方法＞

名前の文字数のます目の中に自分の名前を書かせ、国立国語研究所の「読み書き調査」の評価観点で、字形と筆順を

調べた。鉛筆の持ち方についても調べた。

２．第１期：音声法を取り入れた豊かなことばの楽しい体験

「音声法」とは、1 音 1 字というかな文字の原則を守って体系的にかな文字を教える方法である。日本語は 1 音節と 1 文字が対応しており、かな文字は音節を表す表音文字である。そのため、かな文字の指導では音節と文字をきちんと結びつけることが重要であり、音韻意識が文字習得の前提となる。音節分解とは、「うさぎ」は、「う／さ／ぎ」の 3 音節に分けられるというように、ことばを音節に分解することである。音韻抽出とは、「うさぎ」の最初の音節が「う」というように、1 つの音節に注目して取り出すことである。

楽しいことば遊び・文字遊びや読み聞かせを通して、ことばや文字への興味・関心を育み、音節と文字との結びつきに気づかせ、文字指導の基礎となる音韻意識（音節分解・音韻抽出の力）を体系的に育てる。

＜第 7 回：配膳方式のかるた取り＞

「配膳方式」のかるた取りとは、通常のかるた取りとは異なり、各自 9 枚のカルタを並べ（配膳し）、 自分の取ったカードは、裏返して置く。全員がかるたを取ることができ、「ラスト賞」やカードの並びのビンゴなど、勝敗にこだわらないような工夫もある。まだひらがなが十分に読めない子も、絵を手がかりにして楽しそうに取り組む姿が見られた。文字への興味・関心に個人差があってもどの子も楽しく活動し、文字への興味・関心を高めることが示された。

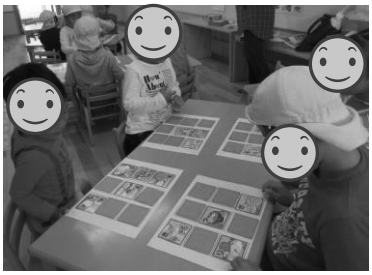
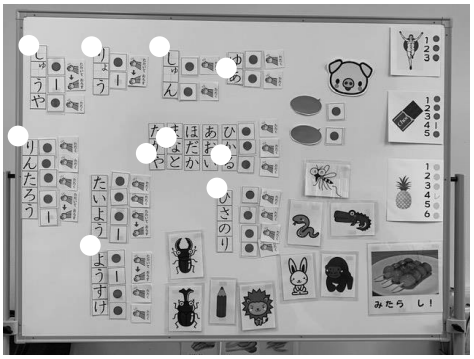


図 1　配膳方式のかるた取り

＜9 回～12 回：音節記号を知ろう＞

実践では、音節を意識させ、音韻意識を育てる活動に取り組んだ。じゃんけんに勝ったときに出した手（指）の数だけ進む「グリコじゃんけん」遊びの後、子どもの名前を 1 音 1 音の音節に分解し、発音しながら音と対応させて手をたたく「みんなの名前（音節分解）」遊びをした。名前を音節記号で表した後、さらに音節記号に文字を当てて示した。子どもたちの名前には特殊音節（拗音・長音）があるので、その存在に気付くことができた。音声と音節記号、文字の結びつきの視覚化は効果的であった。言葉を注意深く聞いて、その言葉の中の音を取り出し、その中にどんなことばがあるかを探す「ことばのかくれんぼ」遊びや「名前のかくれんぼ」遊びでは、言葉のおもしろさや楽しさを味わうことができた。言葉に含まれる音（文字）は同じでも、音（文字）の位置が逆さになる「さかだちことば」と、逆さになった友だちの名前を聞いてそれがだれかをを当てる「さかさのともだちだーれだ」遊びでは、逆さになったら違う言葉になる不思議さやおもしろさ、



楽しさを味わうことができた。

図 2　みんなの名前（音節の記号の視覚化）

いろいろなことば遊びの体験は、ことばのおもしろさややりとりの楽しさを味わい、ことばや文字への興味・関心を引き出すことが示された。ことば遊びを楽しむ中で、耳で聞いたことばの一つ一つの音に注目することができるようにした。音節の記号「●（音節）」「レ（促音）」「―（長音）」の提示は、音節を視覚的に捉えやすくなり、音節に合わせて手をたたく、握るなどの動作も合わせることで楽しく音韻を意識することに効果を上げた。

＜第 10 回：ひらがなめくり＞

「ひらがなめくり」（図 3）は、ひらがな五十音（あ～ん）のカード 46 枚と、「ラッキーカード：もう 1 枚余分にカードを取ることができる」8 枚、「ざんねんカード：カードを取ることができない」8 枚の計 62 枚のカードを使って、楽しくひらがなを覚えたり、ことばを作ったりできるカードゲームである。

図 3　ひらがなめくり

カードを 1 枚取って、そのカードと手持ちのカードでどんなことばができるかを考えていた。友だちの取ったカードと自分の手持ちのカードを使ってできる他のことばを考えたり、ことばを思いつけない友だちに教えたりと、楽しく取り組む姿が見られた。また、「ラッキーカード」が出て喜んだり、「ざんねんカード」でがっかりしたりするなどゲームの盛り上がりを楽しむ姿も見られた。語彙を拡充し、音節と文字との結びつきに楽しく気づくことができることが示された。

図 4　ゲームの様子

＜第 12 回：ひらがなビンゴ＞

4×4 ますのビンゴカードにひらがなカード 16 枚を置くビンゴゲームである。子どもの読み書きの実態に合わせて、文字が小さく絵が大きいカード、絵が小さく文字が大きいカード、文字だけのカードの３種類（図 5）を用意した。絵とひらがなのあるカードを拡大印刷したものを１枚ずつ子どもたちに見せて進める。自分の取ったカードは、裏返して置く。早く上がった子は「トップ賞」、最後まで上がらなかった子は「ラスト賞」として、勝敗にこだわらない工夫があるので、最後まで楽しくゲームに集中する姿が見られた。ひらがなが十分に読めない子も、楽しく活動できた。文字への興味・関心に個人差があっても楽しく取り組めることが示された。遊びの中で一つ一つの音声をしっかり聞き取って、1 音節に 1 文字が対応していることを気づかせるのに有効であった。

図 5　ひらがなカード

３．第２期：豊かな書きことばの世界の体験

入学後のかな文字学習につながる活動で、書きことばの世界への意欲や小学校での学びへの期待を高める活動を中心にして進める。

文字を学びたい、使いたいという意欲を引き出す活動に楽しく取り組むことで、文字の必要性や役割に気づかせ、書きことばの世界への意欲を育てる。手指の機能の発達を促す楽しい活動で

運筆の力や空間認知の力を育て、のぞましい鉛筆の持ち方や筆順を意識できるようにしていく。一人ひとりの状況を受け止め、丁寧に指導する。

＜第 13 回：ことばの変身ボックス「てんまる変身」＞

変身ボックス（図 6、図 8）は、変身ボックスを通ると、違うことばに変わってしまうおもしろさや楽しさを体験できる仕掛けである。子どもたちは、「はけ」が「はげ」になるように、変身ボックスを通ってことばが変身することを知り、何に変身するのかを考えて楽しんでいた。濁点（゛）をつけただけで意味やことばの雰囲気が変わってしまう不思議さやおもしろさ、楽しさを味わうことができた。

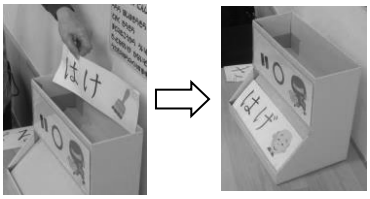


図 6　ことばの変身ボックス

「『゛』をつけて変身させよう遊び」では濁点棒（図 7）を使用して濁音（にごった音）の存在に気づかせ、清音と対比して意識的に音節を聞き取ることができるようにした。子どもたちは、「てんまる変身」と言いながら濁音の入ったことばを楽しそうに考え話し合う姿が見られた。

変身ボックスはことばが変身する楽しさを味わうことができ、濁音の意識化に有効であった。

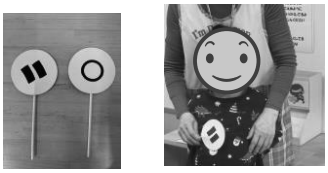


図 7　濁点棒

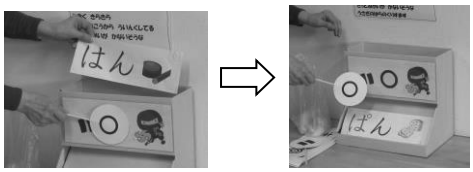


図 8　「てんまる変身」の例

＜第 14 回：五十音をつくろう＞

行別に色が異なるひらがなカードを並べて五十音表をつくり、ひらがなの「行」は発音の仕方が共通しているという五十音表の構成について知らせた。のばした音が同じものが五十音の「段」になっていることにも触れた。行の意識がなく、あいうえお表をお経のように唱えるだけだった子も、音節を意識してはっきり発音したり、行ごとに区切って読もうとしたりしている姿が見られた。

＜第 14 回：ことばの変身ボックス「かっぱ変身」「ふくろう変身」＞

促音（「っ」）や拗音、長音など、文字と音が一対一で対応しない特殊音節は、ひらがなの学習で特につまずきやすいと言われる。そこで、変身ボックスを使い、清音と対比することで特殊音節を楽しく学ぶことができるようにした。

音節に合わせて手をたたく、握るなどの動作と合わせて、音節記号「●（音節）」、「レ（促音／つまった音）」、「ー（長音／のびる音」を提示して、視覚的に音韻を意識できるようにした。「ねこ」が「ねっこ」に変身する「カッパ変身」（図 9）、「おばさん」が「おばあさん」に変身する「ふくろう変身」（図 10）は、変身ボックスでどんなことばに変身するのかが予想しやす

いようで、うれしそうに発表する姿がよく見られた。活動が終　　**図 9**　　**図 10**
終わった後、「ぼくの弟『こうたろう』は、『●んたろう（友だち)』より難しいよ」と言って手をたたきながら発音して、長音が二つあることを報告する子もいた。変身ボックスの利用と特殊音節の記号による視覚化は、特殊音節を音声として意識したり聞き分けたりするためにも有効であった。「ひらがなめくり」は、濁音や促音「ッ」、長音「ー」のカードも加えてことばを作ることにした。清音だけよりことばを多様に考えている姿が見られた。

＜第 15 回～第 19 回：ひらがなスタンプ＞

ひらがなスタンプは、文字を読むことができれば、書くことができなくても文字や文を書くことができる。音声を文字で表現できる楽しさがあり、文字の世界の楽しさを知ることができる。促音や長音、拗音などの特殊音節の表し方については、子どもの実態や教えてほしいという気持ちに応じて伝えた。

「すきなもの　おしえてね」では、子どもたちは、ひらがなスタンプを早く使いたくてたまらない様子で、準備が整うと意欲的に取り組んでいた（図 11)。書いた用紙を見せて、好きなものを友だちと教え合う姿が見られた。文字を十分に読めない子には音声と結びついた文字スタンプを渡して自分の名前を書く体験をさせたところ、自分から進んで名前の文字を何回もスタンプで書く姿が見られた。1 音と 1 文字が対応することの理解を進めることができた。「めいしでよろしく」（図 12）では、様々なかわいいカットのついた名刺の用紙を用意し、自分の作りたい用紙を選ぶようにして、制作の意欲を高めた。用紙のイラストの塗り絵をすることで、文字を書くために必要な運筆の力を高めることができた。子どもたちは、好きな用紙を選んでひらがなスタンプで自分の名前を書き、塗り絵も意欲的に取り組み、家族や友だちに渡すのを楽しみにしていた。名刺の交換会も楽しそうに取り組む姿が見られた。「しりとり」（図 13）ではひらがなスタンプの使い方にも慣れてきた様子で取り組む姿が見られた。「おてがみごっこ」でもカットのついた用紙を選んで手紙を書き、カットの色塗りもするようにした。家族や友だちに渡すのを楽しみしている声が聞かれ、意欲的に取り組む姿が見られた。友だちに宛てた手紙を交換して読み合う姿も見られた。クラスのみんなに宛てて書いた手紙（図 14）を掲示してもらった子は、みんなに見てもらうことができ、喜んでいた。文字を使って伝え合う楽しさを味わうことができた。

図 11　スタンプを使う様子

図 12　名刺の例

図 13　しりとり

図 14　手紙

ひらがなスタンプは、文字を使ってみたいという意欲や動機を引き出し、書きことばの世界を体験するのに有効であった。また、音声を簡単に文字に変換することができるので、音節と文字

との結びつきに気づかせることができた。自分の思ったことや考えたことを伝える楽しさを味わうことができ、文字を使ったコミュニケーションの楽しさを知るのに効果的であった。

＜第 20 回：自分の名前の文字を粘土でつくろう＞

入学後開始される文字学習では筆順が指導される。自然に文字を獲得した子どもたちは、正しい筆順で文字を書く必要性については気づいていない。そこで、筆順の大切さを知らせ、筆順も意識して文字を書くとよいことを教えた。筆順を色別にした筆順の動画を視聴したが、筆順の色は入学後に学習する筆順の色に合わせたものを用意した。子ども一人ひとりに筆順の色を示した名前の手本（図 15）を用意し、字形と筆順を確認させてから文字作りに取り組んだ。粘土で文字を作る用紙（図 16、17）は、名前の 1 文字目のプリントを用意し、線をスタートする場所がわかるように書き順の色のシールを貼っておいた。そこに筆順の色の粘土で作った線を載せて文字を完成させた（図 19）。「1 番選手、赤～」「二番選手、青～」などと言いながら粘土でへびの線を作り、粘土の文字作りを楽しむ姿が見られた。

この活動は、文字を学びたいという意欲を高め、文字の線の構成や重なり、つながりを楽しみながら認識することもできるので、筆順の大切さや文字の字形を意識するのに有効であった。

図 15　名前の手本

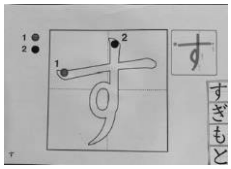
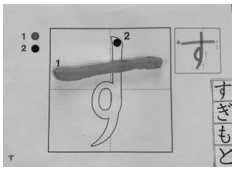


図 16　文字作りの用紙



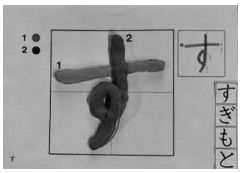


図 17　粘土で作った名前の文字

＜第 21 回：自分の名前の文字をドットシールでつくろう＞

「自分の名前の文字を粘土でつくろう」と同様の名前の文字のプリント（図 18）を用意し、筆順の色のドットシールを貼って自分の名前の文字を作った。筆順の色を示した名前の手本を見て筆順を確認しながら取り組む姿が見られた。名前の文字の後には姓の文字にも取り組んだ。シールを貼り終わった子は、シールの線をなぞりながら字形と筆順を確認するようにした。集中して貼ることができたが、作業量が多くて貼り切れなかった子や欠席していた子は、後日、個別に自由時間に時間をとって取り組むようにした。

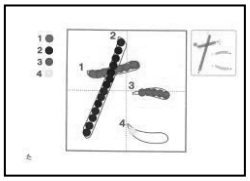


図 18　文字作りの用紙

決められた方向にドットシールを貼ることは、筆順の大切さや線の重なりを意識して文字を捉えたり、指先の巧緻性を育てたりするのに効果的であった。

＜第 22 回：鉛筆の持ち方＞

入学後の文字学習では始筆と送筆、終筆の意識も、のぞましい鉛筆の持ち方とともに重要である。そこで、体を動かすことと合わせて始筆などの意識がもてるような活動に取り組んだ。ゆうぎ室で線の上を「用意」「スタート」「ストップ」の合図で動き、始筆と送筆、終筆を意識できるようにした。子どもたちは、合図を言いながら楽しそうに体で線を書いていた。その後、座って

合図を言いながら手で空中に線を書く「空書き」や、指先で床に線を書く線書きに楽しく取り組む姿が見られた。体や手先を楽しく動かすことは、始筆と送筆、終筆の意識化に効果があった。

のぞましい鉛筆の持ち方は、色別シールを鉛筆の指の位置と鉛筆が触れる手の位置に貼って確認できるようにした。鉛筆は通常の六角形ではなく、持つ位置がわかりやすい三角鉛筆を使用した。シールを目印にして鉛筆を持ち、のぞましい持ち方ができているかも確かめながら持ち方を何回も練習する姿が見られた。「鉛筆で書こう」では、のぞましい持ち方を確かめながら書く様子が見られた。

鉛筆と鉛筆が触れる位置にシールを貼ることは、のぞましい鉛筆の持ち方がわかり、子ども自身が持ち方を確認するのに有効であった。

＜第 23 回：箸の持ち方と鉛筆の持ち方＞

鉛筆のシールでのぞましい鉛筆の持ち方を確認しながら鉛筆を持った後、もう 1 本の鉛筆を差し入れる方法で箸の持ち方を教えた。子どもたちは、鉛筆の持ち方と箸の持ち方の共通点に気づくことができた。その後、箸に持ち替え、箸の持ち方を確認した。「マカロニ移し」では箸の持ち方に気をつけてマカロニを移す姿が見られた（図 19）。友だちとタイムを競ったり、箸の持ち方を教え合ったりして楽しく活動する姿が見られ、鉛筆と箸の持ち方を意識化するのに有効であった。

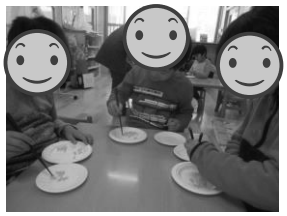


図 19　マカロニ移しの様子

＜第 24 回：「にんにん体操」と運筆練習＞

ひらがなを書くためには筆圧を調整して自在に様々な線をかくことができる運筆力が必要である。「にんにん体操」とは、始筆や送筆、終筆、線の方向を体や音声で表現するもので、運筆練習の準備運動である。子どもたちは、元気よく声を出してにんにん体操を楽しんでいた。その後、横線、縦線、斜めの線、円などを、手や指、頭やお尻などで楽しそうに空中に「空書き」する姿が見られた。「運筆練習」では、筆順の色のクーピーを使い、長い横線、長い縦線、斜めの線、円などをかいた（図 20）。指示をしっかり聞いて、始筆や終筆にも意識を向けて取り組む姿が見られた。体を動かしたり声を出したりしながら行う楽しい運筆練習は、活動の意欲を高めることが示された。また、始筆や送筆、終筆、線の方向の意識化にも効果があった。

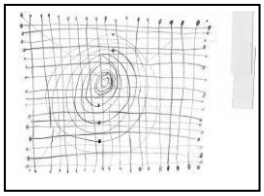


図 20　運筆練習

＜第 25 回：自分の名前のプリントを書き順の色で書こう＞

にんにん体操を行い、線の方向や始筆、終筆に気をつけることように声かけをしてから活動を開始した。ドットシールで作成した名前の文字のプリントや、名前のお手本で筆順を確認し、鉛筆の持ち方も確認してから名前のプリント（図 21）に取り組んだ。線の方向や鉛筆の持ち方について個別支援したが、子どもたちは、筆順や始筆や終筆、鉛筆の持ち方を自分で確かめながら意欲的に取り組んでいた。筆順の色で名前の文字を書くことは、筆順を意

識して文字を書くのに有効であった。

図 21　名前の用紙

＜第 26 回：自分の名前のプリントを鉛筆で書こう＞

学校で行われる文字指導のやり方で活動を進めた。名前のお手本での筆順の確認、のぞましい鉛筆の持ち方の確認などの注意や進め方の説明の指示を聞いてからプリント（「図 21」）に取り組んだ。取り組んでいる際には、字形の見方や線の方向、鉛筆の持ち方について個別支援した。子どもたちは、筆順や始筆や終筆、鉛筆の持ち方を自分で確かめながら意欲的に取り組んでいた。

自分の名前のプリントは、自分の名前を正しい筆順で字形を考えながら丁寧に書こうとする意欲を高め、小学校での学びへの期待を高めることが示された。

４．読み聞かせ

活動の最初には、イメージやことばを豊かにし、みんなで楽しめる絵本の読み聞かせをした。子どもたちに好評な絵本は、同じシリーズを次回に用意したので喜んで絵本に集中して楽しむ姿が見られた。また、活動の前には活動につながる絵本を選んで読み聞かせをした。読み聞かせによって子どもたちの活動の意欲が高まり、意欲的に活動に取り組む姿が見られた。

読み聞かせは、豊かな文字の世界の出会いと楽しさがあるので、書き言葉の世界への意欲や動機を育てる。活動に関連する絵本の読み聞かせは、活動や遊びのイメージを広げ、活動への意欲を高めるのに効果があった。

Ⅳ．総合考察

本研究では小学校への接続を意識し、遊びの中で楽しくことばや文字への興味や関心を育み、入門期のかな文字学習につながる力と書きことばの世界への意欲を育む活動を実践し、検討した。その結果、かな文字学習の土台となる力を楽しく育む方法として以下の 4 点の有効性が明らかになった。

１．音声法による体系的なかな文字指導

音声法を取り入れた楽しいことば遊び・文字遊びの活動はことばや文字に楽しく親しむことができるので、ことばや文字への興味や関心を育んで、音節と文字との結びつきに気づかせ、文字習得の前提である音韻意識を育てることが明らかになった。ことばや文字への興味･関心を高め、音韻意識を育てる工夫では、音節を表す記号による視覚化と音節に合わせた動作化が効果的である。また、「ことばの変身ボックス」も、文字と音が１対１で対応していない特殊音節を楽しく意識することができ、有効であった。ひらがなスタンプも、音声から文字への変換が容易で、音節と文字との結びつきの意識化に効果があった。

２．特別支援教育のスキル・アイディアの利用

特別支援教育のスキル・アイディアには、文字への興味・関心に個人差があっても楽しめる工夫があり、どの子も「楽しい」「やってみたい」と思って参加できる楽しい活動であることが示された。配膳方式のかるた取りやひらがなビンゴ、ひらがなめくりなどのゲームは、どの子も楽し

く活動することができ、有効であった。また、就学前のかな文字指導には、特別支援教育のスモールステップによる丁寧な指導のアイディアが効果的であることが示された。読みの実態に合わせた３種類のひらがなカードや、筆順の色の粘土やドットシールを使ったかな文字作り、運筆を体や音声で表現する「にんにん体操」が有効であった。

３．書きことばへの興味・関心を育む活動

就学前の書きことばの移行期においては、書きことばへの意欲を育む楽しい活動や読み聞かせが、書きことばへの興味・関心を育てることが明らかになった。ひらがなスタンプは、文字を知りたい、使ってみたいという意欲や動機を育て、書きことばに楽しく親しむのに有効な手段である。また、音節と文字との結びつきの理解を深めるのにも効果がある。ひらがなスタンプの利点としては、読み書きの差があっても、音声を容易に文字に変換することもできるので、個別の支援があれば一緒に楽しむことができる。文字を使って自分の思いや考えを伝える喜びや楽しさを味わい、文字によるコミュニケーションの楽しさを知ることができる。文字の必要性や役割に気づき、書きことばへの意欲を高めることが挙げられる。

毎回の読み聞かせは、豊かな文字の世界に出会うことができるので、書きことばの世界への動機や意欲を育てることが示された。また、活動につながる絵本の意図的な使用は、活動への意欲を高めることができることが明らかになった。

４．入学後のかな文字指導につなげる活動

ひらがなの筆順を色別にした筆順の動画や名前の手本で字形や筆順を確認したり、筆順の色の粘土やドットシールで自分の名前の文字を作ったりする活動は、文字を学びたいという意欲を高め、正しい筆順の意識化にも有効であった。自分の名前のプリント練習も、小学校での学びへの期待を高めることができた。自分の名前の文字に取り組むことで、入学後のかな文字学習で必要な筆順や字形にも気を配る大切さを知れば、小学校での学びでそれが生かされることを期待できる。運筆練習では、体や音声で表現する「にんにん体操」や空書き、指書きが、始筆と送筆、終筆の意識化に効果があった。色別のシールで指の位置を示した鉛筆の使用は、のぞましい持ち方を知るのに有効であった。箸の持ち方と合わせた指導も効果を上げた。

Ⅴ．おわりに

グローバル化した日本には外国籍の人々や外国にルーツを持つ子どもたちと共存していることは珍しいことではない、むしろ今後も増え続けていくであろう。その中でことばを育む環境や貧困による教育格差を生じる子どもたちに楽しく確実に学びを保障することは我々に課せられている課題である。

ノーベル賞受賞者であるジェームス・Ｊ．ヘックマンは、『幼児教育の経済学』という著書で、「非認知能力が生涯にわたる発達、社会生活全体での幸せに影響する」と指摘し、広く注目された。教育の投資効果に関する研究だが、認知能力（テストの成績、読み書き、計算など）よりも非認知能力（意欲、実行力、協調能力など）が長い人生において多大な影響を及ぼすことを示唆

した[ii]。この点において、日本の保育理念は非認知能力を培うことに優れていると考えられる。日本の保育現場では、リズム・歌・手遊び・絵本の読み聞かせのほか、思いやり・愛他性・協調性など従来の情操・道徳教育のような理念のもと、そこで培われる人間性は評価に値する。これが生涯において、幸福感を感じることにつながると思われる。本研究では多くの非認知能力を伸ばす実践活動を取り入れた点が評価すべきである。一方、認知能力の読み書きは学力のベースになるものであり、低学力を避け、高学力をえるため欠かせない能力である。認知能力と非認知能力のバランス良い保育・教育を施すのは言うまでもなく教育の真義である。

日本における子どもの貧困問題がとり沙汰されてから久しい。コロナ下、これからますます貧困問題が深刻化することが懸念される。1997 年に中田らの『日米のシングルマザーたち』[iii]が出版されてから、シングルマザー世帯の貧困が注目された。あれから 24 年間を経た現在もなお「子どもの貧困」が深刻化している。筆者らは 2017 年より 3 年間、「東アジア保育者養成研究会」で「現代の子どもの貧困」の課題に取り組み、連続して日本保育学会で、国際比較研究及び日本での事例研究を通して共同研究をしてきた[iv]。共同研究より、貧困問題による教育格差問題の深刻さを痛感した。就学前から貧困による学力や格差が生じている現状から、教育格差をなくすために文字学習は第一歩と考えた。その後の共同研究活動により、2 年間連続して「文字学習」に関連したテーマで学会発表し、課題として取り組んできた。[v]

教育格差をなくすために、ことばだけではなく、しっかりとした書きことば「文字学習」の土台作りは欠かせない。本研究の実践活動のような文字やことばに親しむ体系的な活動は、遊びの中で楽しくことばや文字への興味や関心を育み、文字の学習につながる力を育むことができた。書きことばの移行期においては、子どもたちが文字を学びたい、使いたいと思う楽しい活動が、書きことばへの意欲を高めることを実践の中から明らかにすることができた。

保育者養成の場で、小学校を見通した文字指導のあり方やその方法を正しく認識できるように伝えていくことが今後の課題である。

謝辞：

実践に当たって、協力していただいた保育園の保育者たち、園児たち並びに保護者たちのご協力に深く感謝申し上げます。

追記：

本研究の一部は 2021 年 5 月に開かれた日本保育学会第 74 回大会に於いて発表したものを加筆し、まとめたものである。筆者らは、「東アジア保育者養成研究会」のメンバーとして活動している。

【註】

[i] 日本財団「家庭の経済格差と子どもの認知能力・非認知能力格差の関係分析」(2018)
家庭の経済格差と子どもの認知・非認知能力格差の関係分析（全文）（nippon-foundation.or.jp)
https://www.nippon-foundation.or.jp/app/uploads/2019/01/wha_pro_end_07.pdf （情報取得日 2021 年 8 月 13 日）

[ii] ジェームス・J・ヘックマン(2015) 『幼児教育の経済学』(古草秀子訳) 東洋経済新報社、pp.17-18

[iii] 中田照子・杉本貴代栄・森田明美 (1997)『日米のシングルマザーたち』ミネルヴァ書房

[iv] (1)陳惠貞・劉郷英・丹羽正子・平岩定法・中田照子・宍戸健夫 2017 現代の子どもの貧困－日中比較研究①日本の実態－ 日本保育学会第 70 回大会発表要旨集、511、発表 ID:K-D-8-290

(2)劉郷英・陳惠貞・植村広美 2017 現代の子どもの貧困－日中比較研究②中国の実態－ 日本保育学会第 70 回大会発表要旨集、512、発表 ID:K-D-8-291

(3)陳惠貞・杉本美苗・丹羽正子・平岩定法・中田照子・宍戸健夫 2018 シングルマザーにおける生活と子育て―現代の子どもの貧困 日本保育学会第 71 回大会発表要旨集、1196、発表 ID:P-D-13-4

(4)陳惠貞・杉本美苗・丹羽正子・平岩定法・中田照子・宍戸健夫 2019 保育専門職の学生におけるシングルマザー世帯の貧困の意識調査―現代の子どもの貧困 日本保育学会第 72 回大会発表要旨集、1139-1140、発表 ID:P-D-5-4

[v] (1)陳惠貞・杉本美苗・丹羽正子・平岩定法 2020 文字の学習につながる力を育てる―現代の子どもの貧困― 日本保育学会第 73 回大会発表論文集、1209-1210、発表 ID:P-D-3-5

(2)陳惠貞・杉本美苗・丹羽正子・平岩定法 2021 入門期のかな文字学習につながる力を育てる―書きことばへの意欲を育むことば遊び・文字遊びの活動― 日本保育学会第 74 回大会発表論文集、861-862、発表 ID:P-D-2-8

参考文献

1.中室牧子(2015)『「学力」の経済学』ディスカヴァー・トゥエンティワン
2.中山芳一(2018)『学力テストで測れない 非認知能力が子どもを伸ばす』東京書籍
3.ボーク重子(2018)『「非認知能力」の育て方』小学館
4.ポーク・タフ(2017)『私たちは子どもに何ができるのか 非認知能力を育み、格差を挑む』
5.しおみ としゆき (1986)『幼児の文字教育』 大月書店
6.丸山美和子 (2005)『小学校までにつけておきたい力と学童期への見通し』 かもがわ出版
7.須田清 (1979)『かな文字の教え方』 むぎ書房
8.井上賞子・杉本陽子 (2012)『特別支援教育はじめのいっぽ！国語の時間』 Gakkenn
9.梅田真理 (2016)『特別支援教育をサポートする読み・書き・計算指導事例集』ナツメ社

活動につながる読み聞かせの絵本（数字は実践の回）

① 『しりとりのだいすきなおうさま』(中村翔子) 鈴木出版
⑤ 『あっちむいてほいぞう』(矢玉四郎) ポプラ社
『ひだりみぎ』(新井洋行) KADOKAWA
『おめんです』(わだことみ) 偕成社
⑦ 『あっちゃんあがつく』(さいとうしのぶ) リーブル
⑨ 『どかどかじゃんけん大会』(藤本ともひこ) 童心社
⑪ 『めくってごらん』(ふくだとしお) イースト・プレス
⑫ 『さかさのこもりくん』(あきやまただし) 教育画劇
⑬ 『へんしんトンネル』(おきやまただし) 金の星社
『てんつくサーカス』(こうだてつひろ) くもん出版
⑭ 『ことばのあいうえお』(五味太郎) 岩崎書店

『れいぞうこ』（新井洋行）偕成社
⑮　『まめうしくんとあいうえお』（あきやまただし）PHP 研究所
⑱　『たべものやさん　しりとりたいかい　かいさいします』（シゲタサヤカ）白泉社
⑲　『よろしくともだち』（内田隣太郎）偕成社
⑳　『なにをたべてきたの？』（岸田衿子）佼成出版社
㉔　『ぼくのくれよん』（長新太）講談社
『ぐるぐるぐる』（内田隣太郎）金の星社

陳　惠貞（名古屋経営短期大学　教授）
杉本　美苗（元　名古屋市立港楽小学校　教諭）